

【ワークショップ報告 第52回】

2020年11月26日（金）

〈食べる〉のどこに倫理はあるのか？食農倫理学の長い旅

提題者：総合地球環境研究所 太田和彦

本稿では、まず我々の生活に欠かせない「食」にフォーカスを当てた食農倫理学の概観が紹介され、その発展の歴史からたどる現在、食農倫理学の今後と課題について紹介する。

1. 食農倫理学の概観

まず、2度にわたる世界大戦を機に、フードシステムが大量生産・大量移送・大量消費・大量廃棄を前提とする形に移行された。これは、特に先進国に豊かな生活（豊富な供給）をもたらしたが、一方で発展途上国やそれを取り巻く環境への負荷は甚大なものである。そのため、このフードシステムを今後も維持していくことは、生態学的条件を考慮してもほぼ不可能であると考えられている。本項で頻繁に扱った「フードシステム」とはどのようなものであるのだろうか。「フードシステム」というタームは、農業経済学において頻繁に用いられ、食料供給における一連の流れを生産・流通・加工・消費・再活用のステージに分け、システムとして把握する事を指している。そして、基本的に物流とそれを支えるインフラに着目する観点であるとされている。食農倫理学の議論は、扱うトピックは多様であっても、基本的に既存のフードシステムの透明性や公平性、持続可能性の向上を目指したものである。しかしながら、フードシステムを議論するにあたって、関連する要因やステークホルダーの多さによって「厄介な問題(wicked problems)」の性質が強いとされている。この「厄介な問題」は、政策学やデザイン論で多く用いられるタームである。厄介な問題を構成する要素は以下の通りであり。

- ・ある問題への対処が、別問題の要員となる。(Churchman, 1967)
- ・異なる利害関心、現状認識をもつ多くのステークホルダーがおり、全員が満

足する解決策がない。(Camillus, 2008)

- ・変化が早く、状況を明示化できない。(Conklin, 2006)
- ・問題があたかも存在しないように振る舞う「麻痺」や、一つの手法・文脈を「過大評価」した取り組みは、思わぬ副作用によって状況を悪化させる可能性が高い。(Termeer & Dewulf, 2019 他)

すなわち、単純な問題や複雑な問題と比較しても、“あるべき姿”の正解が存在せず、課題や論点をゼロから考える必要があるなどという点において厄介である。

2. 食農倫理学のこれまでと現在

歴史の中で「食」に対する思考や態度の変化は多数見られてきた。まず、紀元前 300 年代の古代では、ストア派・エピクロス派が食習慣について節度と快楽にフォーカスを当てた体系的な哲学的考察を行っていた。また、ヒポクラテスは食養生についての考察を行っていたり、中国では食材や調理法を世界観と接続させた態度がとられていた。そして、中世に入ると食生活は個人の道徳性を移す鏡として捉えられた。1600 年代～1850 年代の近代では、L. コルナー、F. ベーコンなどが食生活における道徳性と健康維持のための慎重性への側面を分離して考察。健康のための食餌療法なども登場した。そして、それ以降の現代では栄養学と統計学が発展したことにより、人口と食料の安全性保障が政策課題として重要であると認識され始める。同様に、既存のフードシステムによって未来の食が危機に瀕しているリスクが認知されている。また、都市化に伴って、食料の生産地と消費地間の乖離が深刻になるという問題も浮上し始める。フードチェーンが不透明になり始め、食卓からは見えない場所で生じる社会的不公正がシンクレア(1905)の『ジャングル』にて告発された。そして、環境問題が深刻化する中で、これまで着目されていなかった“肉食”の道徳性が問われ始める(道徳的に問題のある食べ物)。肉食において、動物の生存権を主張するレーガンや、種差別を主張するシンガー環境負荷の大きさを主張するラッペが注目を集めた。

また、食農倫理学の現在地として「コモンズとしての食」が紹介されている。ここでは、「食は個人的な営為であると同時に、社会的な営為である」と

いう文言とともに、カローラン(2018)の『No One Eats Alone』における主張が紹介されている。(以下資料から一部抜粋)

私たちは消費者(consumer)であると同時に市民(citizen)として食べているのです。(Calolan, 2018)

これによれば、食が有するコミュニティ作りや文化・教育、地域活性化や賑わい、観光、栄養、福祉などといった多面的機能が評価される中で、人々の暮らしを支える共通基盤(コモンズ)として見直す動きが見られている。

そして、食農倫理学は食の望ましい在り方やフードスケープの語り方(ナラティブ)の多様性による価値観の相違についての無自覚を超え、異なるナラティブをつなぐための最低限の了解事項を提起する役割を果たそうとしている。ここでの異なるナラティブというのは、科学と政策決定、スピリチュアリズムや農者における「食」の語られ方の違いを指す。

3. 食農倫理学のこれから

食農倫理学には、様々な立場からの主張が関わっている。例えば、社会的公正を主張する立場、畜産や菜食主義の立場、飢餓と貧困の立場などからの主張は実に多様である。しかしながら、いずれか一つの立場の思考が支配した時、実践や探究は過ちを犯すと考えられる。なぜなら、自分とは異なる見解を持つ人々を社会的意思決定のプロセスなどから組織的な排除をするとき、物事の道徳的正当性が危ぶまれることになるからだという主張が紹介されている。(Thompson, 2015)

食肉について問題意識を持つ者の間でも、異なる価値観を有している場合は十分にあり、それは議論を複雑にさせる理由でもある。食肉における議論のうち、(1)「最大多数の最大幸福」に反するという議論、(2)環境負荷が高いという議論をピックアップして検討が行われている。まず、(1)の場合は義務論や権利論ではなく、功利主義の立場から肉食に批判的である。ここでは、動物の生命そのものよりも、劣悪な飼育環境や残酷な屠畜方法の批判が主にされている。この立場では、当該動物にとってのより良い飼育環境とはいかなるものであるのかについての検討・考察がされている。次に、(2)の立場

を詳しく検討すると、家畜の飼料を育てるために使用される農地は地球全体の土地面積の26%もの割合を占めるほか、家畜が利用する水の量は世界の消費量の27%を占めている莫大な環境フットプリントを批判している。これらの農地や水の使用は、食肉生産でなく途上国や飢餓に苦しむ人口のために利用可能なものであり、効率的な利用についての批判が向けられることも多い。しかしながら、この立場の主張は「肉を食べるべきでない」というよりも「肉の消費量を減らすべき」に近く、いわゆるフレキシタリアン（菜食ではないが、肉食を減らすライフスタイル）を支持するものである。近年、このフレキシタリアンは増加傾向にある。以上で紹介した2つの立場以外の宗教的立場も含め、食肉に批判的な立場をとる人はどのレベルでの技術的解決を許容するのだろうか。例えば、人口肉（大豆ミート）といった、100%植物由来の代替肉は手軽に買えるようになりつつある。また、ラボで細胞を培養することで、動物の苦痛を生み出さない“肉”も登場している。今後、このような食とテクノロジーの掛け合わせによって新たな食生活への転換が図られることで、本章で紹介したような食肉批判の立場の見解も変化しうる可能性があるだろう。

4. 終わりに

変わりやすく予測できない現代における「食」を取り巻く問題は、非常に複雑である事がわかる。また、発展を続けるテクノロジーと食の掛け算によって、現代のフードシステムにおける肉食批判の立場も変容の可能性が大いにあるとされる。また、特に現代では単なる消費者としてだけでなく、「食」のバックグラウンドやコモンズとしての可能性を考慮し、見つめ直す必要性が高まっていると言えるだろう。

（要約：神戸大学大学院人文学研究科文化構造専攻 修士課程1年 小幡メグ）